

## 隣に立つ勇氣

守山南中学校三年 兼松 佑佳

差別や偏見はなぜ生まれるのだろうか。この問いに対し、以前の私ははっきりとした答えを持っていた。それは「知らないから」というものだ。相手のことを知らないから、勝手なイメージで決めつけ、偏見をもってしまふ。だからこそ、歴史を学び、その人々の切実な願いや思いを正しく「知ること」が、差別をなくす方法だと思っていた。しかし、ある日の社会の先生との会話で、私のその考えが揺らぐこととなった。

私が人権についての作文を考えているとき、先生と話す機会があった。「どうすれば差別をなくせると思いますか。」この問いに対する私の答えはもちろん、「知ること。」しかし、先生の口から出た言葉はちがっていた。「今までは『知ること』が大切だと言われてきました。でも、色んなことを学んで、ただ知っているだけじゃ何も変わらないんじゃないですか？実際に、どう行動に移すか。それを考えることが大切だと思います。」私はハッとしました。私は教室で話を聞き、「自分は歴史を知っているから差別なんてしない」と満足していただけてはいないか。知識を行動に移すという視点が、私には欠けていたのだ。

その言葉をきっかけに、私は「自分にできる行動とは何か」を深く考えるようになった。以前、総合の学習で観た動画の中で、差別に立ち向かう人が「一緒に闘う」という表現を使っていたことが強く印象に残っている。今の私に、その言葉はとても重く響く。社会にある大きな壁に向かって、誰かと一緒に声を上げ、闘うことができるだろうか。おそらく今の私にはまだそれは難しく、怖いという気持ち勝ってしまう。けれど、「闘う」ことではなく、「隣に立つ」

ことならできるのではないか。それが私のたどり着いた答えだ。

先生は、在日コリアンの方々との関わりについても話してくれた。「もし実際に会った時、カミングアウトしてくれたら、ちゃんとその話に触れることが大切です。遠慮したほうがいいと思って避けてしまふのではなく、その人は知ってほしくて言ったわけだから。」この言葉もまた、私の心に刺さった。もし友達が、私に自身のルーツを打ち明けてくれたとしたら、私はどうしていただろう。きっと「触れてはいけないこと」として、あえて話題をかえたり、聞こえなかったふりをしたりして、「遠慮」をしていたかもしれない。それが優しさだと思っていたからだ。しかし、それは違った。相手が勇氣をもって「自分」を打ち明けてくれたのなら、その思いを正面から受け止めることこそ本当に優しさであり、差別をなくすための第一歩なのだ。特別扱いするのではなく、ただ話を聞き、受け止め、その人の隣に立つこと。これが、わたしにできる「行動」なのだ。

私が誰かの隣に立つことで、何が変わるのだろうかと思う人もいるかもしれない。けれど、もし自分が差別にさらされた時、隣に誰かが居てくれれば、勇氣が湧くだろう。学校で私たちが人権について学ぶ意味も、そこにあると思う。一人では怖いことも、正しい知識を持ち、同じ思いを共有できる仲間がいれば、「それはおかしい」と声を上げることができる。一緒に反論できる仲間をつくるために、私たちは学んでいる。そうやってつくられた「怖くない」という安心感が、差別を許さない空気をつくっていくはずだ。

知識は、持っているだけでは力にならない。誰かの痛みに気づき、隣に立とうとする意志を持ったとき、結びついて力となる。「知ること」で満足していた私から卒業しようと思う。もし今後、誰かが勇氣を出して自分自身を語ってくれたら、私は逃げずに向かい合いたい。そして、その話を受け止め、隣に立つ人でありたい。